だから特色のある植物，たとえば *Helleborus, Tussilago, Muscari, Bellis, Rosa, Euphorbia, Viola, Iris* などは疑問の余地はないが，小形の5弁花となると矛盾が多く，しかもこういうものが数として多いから始末が悪い。たとえば poppy が5花弁で花筒や萼があったり，myosotis が離弁で円錐花序になっていたり，strawberry が5掌状復葉だったりする。こういうのは制作者が気がつかずに矛盾を作り出しているのを無理に同定するのだから，半分は仕方がないとして，明らかに同じ花を絵の部分によって異なった種に同定しているのは著者の責任で，どうもいただけない。どういうわけか *Crocus* と *Helleborus* を混同してしまったところもある。こういう仕事をやる人は植物学の専攻者ではなく，文科系の人なので気の毒ではあるが，“botanical”というからには分類学の専攻者を共同研究者として入れるべきだったろう。本書を提供された人の話では，別に植物学専門家の報告書があり，本書はそれに基づいている筈だというのだが，それにしては矛盾が多すぎる。同定の結果によってその花言葉の意味が違ってくるので，絵の解釈自体が根本的に違ってしまうのだから，同定を軽く見るわけにはゆくまい。botanist がやれば，「写実的」といわれるこの絵の評価は変わるだろう。それとも「当時としては思いのほか写実的」ということだろうか。

ことのついで書くと，我々のところへ他分野の研究者が実験材料の同定を求めることが多いが，彼等はその返事が研究の結果であることを意識していないようだ。とくに困るのは，仕事が終わってから材料の一部を持ち込まれるときである。その名前はわかるかもしれないが，彼が今までそれと「同じもの」を材料としていたかどうかは保証されないのである。「その」名前は分かったとしても，材料全体がそれだったか否かについては同定者は責任をとれない。近頃，文献引用の回数で業績を評価するというナンセンスなソフトウエアが開発されたそうで，そのせいか多数の著者による共著論文や発表がふえているように思う。中には指導教官が学生のやった仕事に共著で顔を出したり，自分の管理する機器を使わせるのに共著を要求する先生もあるといううわさもきく。分類学研究者も，同定の当然の対価として共著を要求したらどうだろうか？　（金井弘夫）

□茨城新聞社（編）：**茨城のきのこ** 287 pp. 1984. 同社，水戸. ¥2300.　“郷土の動植物を紹介するカラー自然シリーズ”（全7巻）の一つ。305種を収録，カラー写真と簡単な解説を付す。菌類の専門家の監修を受けているのは，たいへん良心的と思う。ところで，世間ではキノコを見るとすぐに「食べられますか」と問う傾向がある。一般向けのキノコ図鑑やキノコ誌の方も，とかくこのような読者の要求にひきずられるきらいがある。キノコはしばしば変異の幅が大きく，本書だけで正確に種類が決められるといったものでないだけに，キノコ料理の作り方まで示して，“きのこ狩りに利用できるように”というのは，少し心配な気もする。　（三浦宏一郎）